

特集  
藍より青き吉野川  
川と人のかかわり

Special Features  
The Blue Color Yoshino River rather than in Color Indigo  
Mankind and the River

吉野川と人のかかわり  
Mankind and the Yoshino River

## 吉野川を守る市民の協働

中村英雄

NAKAMURA Hideo

NPO法人新町川を守る会/理事長



### 1 吉野川へのこだわり

水は人間の命の源泉であり、古代から川はその地域に文明の発展をもたらした。吉野川は「四国三郎」と呼ばれ、全長194キロメートル、流域面積3650平方キロメートルをもつ四国を代表する大河であり、その流域は四国4県全てに及ぶ。

この川流域の人々は、かつて暴れ川と呼ばれ幾多の災害をもたらした吉野川の、巨大なエネルギーを産業に活用することから発展を得てきたのである。現在の高知県である土佐藩の時代から材木は重要な産業であり、その輸送には吉野川の急流が活かされた。徳島県においては吉野川の豊富な水が製紙や藍の産地として地域経済を潤してきた。また、産業のみならず流域の人々の営みを支えてきた吉野川は、四国の母なる川と言えよう。

その吉野川にも治水ダムが整備され、近代化が進むに連れて山も荒廃し、川の水量の低下に従って吉野川の環境も悪化するようになった。

この吉野川の豊かな自然や文化、そして川からの多くの恵みを後生にまで受け継いでいくためには、行政だけに頼ることなく、吉野川の流域に暮らす住民一人ひとり

の吉野川に対する想いやこだわりの再生を図っていく必要があった。

我々が、その運動の先頭になって、行政に頼らず自律的に、あるときは行政との協働により行動をしていこうと、平成2年に徳島の川を愛する有志に呼びかけて10人で発足したのが、「新町川を守る会」というボランティア団体であった。

この団体の活動テーマはもとより“河川環境の保全と川を生かした地域づくり”である。

新町川を守る会という名称は、徳島市が吉野川の河口部の平野に拓けた都市であり、その支流として新町川が都市の中心部を流れていることから、まずは、市民の面前での河川環境の保全活動を展開することで、運動効果を高めていこうといった主旨が込められたものである。

当時は、昭和中期からの高度成長を受けて、経済優先のもとに徳島の河川は汚染されその環境は悪化の一途をたどる状況であった。

### 2 新町川を舞台にした活動

徳島県の県都徳島市には、主に吉野川の支流河川が大小138流れ、橋梁の数は1654本と、さながら水郷都市の様相を呈している。この川の流域は、かつて藍染めの原料である藍の産地として栄えた。とりわけ徳島市の中心部を約6.5キロメートル流れる新町川は、長い長い年月にわたって産業河川として人々の営みを支えてきた町の仲間であった。

その後、化学繊維の台頭により藍産業は衰退し、新町川が人々の意識から遠ざかることになると、それまで河川に向かって建ち並んでいた家々も、いつの日か川に背を向けるようになった。夏には子供達が水泳を楽しんでいたほど美しかった川は、昭和40年前後まで流域の工



写真1 - 新町川を守る会の河川清掃作業風景



写真2 - 新町川の遊覧船運航風景



写真3 - 小学校吉野川横断スイミング風景

場・家庭から出される排水で魚が住めないほど汚れたどぶ川と化した。当時、写生に訪れた小学生の画用紙には、黒い水の流れだけが描かれていたといったエピソードが残るほどであった。おまけに中心部を東西に分断するこの川は市民にとって迷惑な存在として疎んじられていた。

新町川を守る会のメンバーは、毎月2回ボート4隻に分乗して小さな網を手に川の清掃を始めることになった。

掃除は都心を囲むようにして流れる新町川と助任川によって、調度植物のひょうたんの形に結ばれた通称ひょうたん島と称される円周6キロメートルの河川と、吉野川の河口にいたるまでの範囲である。

活動当初はベッドやバイク、冷蔵庫、扇風機など驚くような物が川に投げ捨てられており、小さな清掃船は全てすぐに満杯になった。

開始から2年程が経過し、我々の清掃活動が軌道に乗り始めると、マスコミ等でその活動が紹介されるようになり、それまで奇異な活動、何か特殊な団体として捉えられていたものが、多くの市民から徐々にではあるが理解を得られるようになってきた。

### 3 環境整備先行型の街づくり

時代が調度バブル経済崩壊によって大きく転換しようとする頃、それまで徳島市で進められてきた大手デパートをキーテナントとする市街地再開発事業が暗唱に乗り上げることとなった。この出来事を期に徳島市では、再開発手法による街づくりから街の中央を流れる新町川沿川を対象とする、環境整備先行型の街づくりにシフトさせることになった。

それまで再開発事業等の添え物的な扱いであった環境整備を、街づくりのメイン事業として取り組むこととなり、平成元年にJR徳島駅から続く街のメインストリートに

クロスする新町川のウォーターフロントに全長約350mの水際公園が整備された。夜間のイルミネーションも駆使され、街の景観にマッチする形でデザインされた施設は、国の景観賞を受賞するなどの優れたものとなった。

その上、水際公園でイベントなどを開催し、賑わいを創出するために水と緑の基金が、市民からも寄附を募って約2億円で創設された。

この基金からの果実によって、毎年、水際公園において魚釣り大会や、雅楽演奏会、ジャズコンサートなどの各種のコンサートを開催し、正月には寒中水泳大会も復活させた。水際公園に市民が集う機会が増えるにしたがって、この場所での活動がマスコミや市民から注目されることとなった。

平成8年徳島市によって、水際公園の対岸にあたる河川敷の両端にある公園が、イベントなどが常時開催できる多目的公園として整備された。同時にその河川敷へ、地元業者が主体となった木製のプロムナード「しんまちボードウォーク」の整備を誘因することとなった。

このボードウォークには、平成10年3月から遊牧民の移動式住居であるパオを連想させるパラソルショップが



写真4 - 水際の寒月演奏会



写真5 - パラソルショップ



写真6 - 公園図書箱

週末毎に数十基が立ち並ぶことになった。1基約11m<sup>2</sup>の感性豊かなショップ群は、全国にも類例のない商業空間として都心の景観を一変させ、中心部における動線すら変化させるきっかけとなった。また、かつては古い旅館や食堂などがあった川沿いの場末的な通りを、都会的なレストランや、ブティックなどが立ち並ぶおしゃれなストリートへと見事に変貌させた。

最近のソフト事業では、水際公園にボックス(H1.5m x W2.0m x 2基)を設置して、市民に不要となった書籍や雑誌類を持ち寄ってもらい、誰でも自由に借り出すことができる公園図書箱を設置した。「天気の良い日は水際公園で本を読もう」の合い言葉で、新しい市民のライフスタイルとして好評を博している。

この環境整備先駆型の街づくり事業として、水辺の環境整備といった情緒的な都市の環境整備をテーマに街づくりを推進したことは、それからの我が国の低成長時代の始まりや、環境という社会的な課題にその時点で着目した行政の先見性として評価できるだろう。また、その計画に市民が共鳴してさまざまなソフト事業を推進してきたことで相乗効果が高まり、今でいう「市民と行政の

協働のまちづくり」がスタートすることになったのである。都心の水際で憩うことが市民にとって日常的な生活スタイルとなって定着するものとなった。

#### 4 市民活動が吉野川に到達した

新町川を守る会の活動も平成15年度で12周年を迎えるが、平成8年から本格的に吉野川をテーマに広域的な連携と市民への啓発を目的とした大規模なイベントを展開することとなった。事業内容は、毎年夏に実施する吉野川流域の市民5万人による河川一斉清掃である。川を語るシンポジウムには、九州は筑後川、北海道の石狩川など全国の河川環境の保全活動に関わっている代表者が多数集い、意見交換と交流を深めている。また、吉野川10キロメートルスイムマラソンには、全国から100人程度の猛者が毎年参加して覇権を競っている。その他、5000食の大パーベキュー大会や、夜間には花火大会も添えて、多くの市民が3日間、川を遊び川を愛するための大イベントの開催である。

このイベントには、多くの四国の市民や川を愛する活動家が集い交流を深めることで、連携した活動のきっか



写真7 - 吉野川フェスティバル風景



写真8 - 吉野川10キロメートルスイムマラソン風景



写真9 - 吉野川3001年の森作業風景



写真10 - 吉野川3001年の森の看板

けづくりの場もなっている。

あるとき、吉野川の源流の村からの参加者から、会場で吉野川と山林の関係の重要性について話され、現在その山が人の手が入られずに緑の砂漠と化していることが訴えられた。その惨状に心動かされた参加者から、川を豊かにするために源流の村の山林を育む活動に着手しようとの提案があり、平成13年には、源流の大川村と1000年間の村有林の無償貸与契約を結んだ。

街の人間にとっては、森林の間伐や植林は慣れない作業であり重労働ではあるが、「吉野川3001年の森づくり」と命名して、高知県や地元のNPOとの協働で隔月ごとに出向いて作業を行っており、息の長い運動を展開しようと考えている。

また、昨年からは、吉野川において、川の魅力とその本当の姿や川の作法を守ってきた先人の知恵を、広く人に伝える「川に学ぶ体験活動の指導者の養成講座」も実施しており、今年の夏には、「全国川に学ぶ体験活動発表会」の開催も予定している。

その他、徳島県が音頭を取って、吉野川流域の沿岸河川敷において、各種ボランティア団体や企業ボランテ

ィアと養子縁組するアドプト方式が組み込まれ、広域的なエリアによる河川清掃活動が大々的に行われており、毎月1回の清掃活動により吉野川がクリーンアップされている。

こういった市民活動をベースに、徐々にではあるが市民が川に帰ってくる機会が増し、環境へのこだわりと、さまざまな河川環境の保全活動が発生してきているのである。

#### 5 おわりに

こうした川と水を生かした地域づくりと河川環境の保全活動を開始して13年が経過した。「できる人が、できる時に、できる事を」と、お互いに活動を強制しないことを活動方針に、会員全員が「水がきれいになれば、人も街も川を向いてくれるし、水辺に人が集まり憩いの時間を過ごせば、水も水辺ももっときれいにしようと思うはず」を信じてさまざまな活動を展開している。行政とのパートナー関係も良好に作用し、今では市民、マスコミ、企業などからも、新町川を守る会がやるならということで、我々のまちづくり活動に対する理解と協力をいただけるようになり、会員数も現在250人を数える。

今後、地域を想う、心ある人々との交流をますます活発化させて、吉野川を中心に、徳島の特長である水を生かした地域づくりに取り組んでいくことで、地域環境の向上に貢献していけるものと考えている。



写真11 - 吉野川アドプトの活動風景